「君のハートを狙い撃ち！」

これは、言葉の力が《言霊》として当たり前に存在する（中略）世界でのお話。

言葉遊び系ハイテンションガンアクション、言弾シリーズスピンオフ。

今回はちょっと甘酸っぱい青春ストーリー（？）

恋煩え！

走狗流歌

――この物語は用法用量を守ってご使用ください――

И

大陸中心都市ラングアゲ、の隣国であるニアラにある施設、タ―ム。まあ、今回その辺の設定とかあんまり関係ないので、問題児ばっかり集めた寮だとでも思っていただければ結構である。気になる人は前回の「爆ぜろ！」をチェックだ！（宣伝）

さて、今にも日付が変わりそうな深夜。いつもは騒がしいタ―ム寮も流石に静……

「ガ―ルズトークしようぜッ！」

バ―ン！と、勢い良く扉を開いたのは本シリ―ズ主人公（1）悼颯火。ＴＰＯガンスルーのハイテンションである。その後ろで呆れた体を装いながら割りとテンション上がっている目つきの悪い少年は主人公（2）弔祇葬屋。仲が良いんだか悪いんだか分からないおさななじみコンビである。

ああ、タ―ムが静かとかありえませんでしたね！

「やっほ―！　鶯いる―？」

「帰れ」

答えたのは鶯、ではなく、相変わらず不機嫌そうな毒舌少年、頼野琴樹。そのテ―ブルを挟んだ向かいには、当の澄田鶯がいつもの仏頂面で座っている。

「あれ、琴樹、何でお前居んの？　ここ鶯の部屋だろ」

「うるせ―！　お前らには関係ないからさっさと帰れッ！」

しっしっ、と二人を追い払おうとする琴樹だが、なんだか少し恥ずかしそうである。

「……、お前等が今まで話していたことを当てて見せようか」

「黙れ、それ以上何も言うな三白眼。いいから気にせず回れ右！」

「はっはあ、なるほどな～。どうりで、罵詈雑言にいつものキレがないわけだ」

「う、うるさ―い！　颯火も葬屋も黙れ―ッ！　早くどっか行け―ッ！」

いつもは憎たらしいほど饒舌な琴樹だが、上手く言葉が出ないのか暴力に訴えかける始末。ぼかぼか殴ったりしながらニヤニヤする二人をなんとか部屋から追い出そうとしている。無論、小柄な琴樹が肉体派の颯火や、まして、常時三キロのアサルトライフル背負っている葬屋なんかに適うわけもないのだが。

…なんか、楽しくなってきた。

「あれえ、琴樹くん、もうお話終わったの～？」

と、そこで声を上げたのは、鶯のルームメイトであるところの鋭利。ベッドから眠そうな顔を覗かせている。

「ま、まだ終わってない、けど！　ちょっと待て！」

「まあ別にいいけどね、僕また寝るし―。けど、いいよね恋愛の話ができるなんて―」

「うわああああああああッ！」

「僕そういうのないからなあ―鶯達がうらやましいよ―青春だよねー」

「うわああああああああああああッ！」

「それじゃおやすみ―」

ひらひらと手を振って、鋭利はベッドの中へ戻って行った。
沈黙。
今の状況を簡単に説明しよう！
色々暴露され真っ赤になって怒りと羞恥に打ち震える琴樹。
無表情を貫いていたがついに耐え切れなくなってテーブルに突っ伏す鶯。
すでに爆睡中の鋭利。
今、葬屋と颯火の心が一つになった。
何これ面白い。
「……、琴樹、ガールズトークしようか」
「……かってにしろよお…」
颯火の言葉に、琴樹は殺意を覚えながらもそう答えるしかなかった。
ちなみに、琴樹も鶯も絶賛片思い中の青春男子である。

И

颯火と葬屋の笑いのボルテージが下がってから、改めてテーブルを囲んだ四人。
「言っとくけど、僕からじゃないからな！　僕のとこにこいつから来たんだ！」
始めに口を開いたのは琴樹。なんでこいつらにこんなこと言わなきゃならないんだよ、と悔しそうに顔を歪めながら語る。
《回想》
「てめえらと同じ部屋でなんか寝れるかよッ！」
「し、仕方ないじゃないですか！　そういう部屋割なんですから！」
『一応、ここに集められてんの腹に一物抱えたヤツラなんだか一人にしたら色々危ないからっていう趣旨でのルームシェア制なんだからちょっとは我慢しろよなー』
「い・や・だ！　僕はお前らみたいな頭のネジぶっ飛んでる故障人間とは違うんだよ！　お前らとルームシェアするくらいなら廊下で寝てやるッ！」
「そ、そんなあ…、琴樹さん風邪引いちゃうよ……？」
『心配すんな、蒼慈。バカは風邪ひかねぇから』
「てめぇえ！」
ターム寮入り初日だった今夜。夜中でも元気にルームメイトとなった気弱な少年・互井蒼慈とその兄の霊—正確には異魂—霜一と琴樹は騒いでいました。そこへ、
コンコン、
控えめに扉がノックされ、少しだけ開かれた扉の隙間から覗いていたのは鶯の暗い瞳だった。何かいいたげに目をキョロキョロさせている。
「あれ、鶯さん？　何か御用ですか？」
「……、」
いつもどおり無言の鶯は、小さくうなずいて部屋に入り、霜一とガンを飛ばしていた琴樹の手を掴んで、消え入りそうな声で一言、
「……話を、」
と言った。突然のことに目を丸くしてぽかんとしていた琴樹だったが、昼間のアレコレ—（爆ぜろ！参照）—を思い出し、全てを理解したように、
「わかった」
とうなずき、霜一に「死ね！」と捨て台詞をはいて部屋を後にしたのであった。
琴樹は、割と空気読める子です。
「……というわけで、僕はこいつの相談に乗ってあげてたんだよ！」
「へえ、意外だな。てっきり琴樹の方からシンパシー感じて押しかけてきたのかと」
「野次馬なお前らなんかと一緒にしないでよ」

そう、そもそも颯火達が鶯の部屋に突撃してガールズトークとか修学旅行の夜の女子みたいなことをほざいたのも、昼間、鶯が皐月―任務等で鶯とコンビを組んでいる高飛車娘―を好いているらしいという話を聞いたからであった。

その鶯はといえば、小さくうなりながら頭を抱えて俯いている。黒髪から覗く耳は面白いくらいに真っ赤だ。

「ま、こんな変人の集まりじゃあ、まともに相談できる人なんていなかったんでしょ。かわいそうに。でも、僕はこいつの気持ちを一番理解してやれると思うし、こいつもそう思ったから僕のとこに来たんだろ」

なんだか琴樹が珍しくちょっと優しげ（当社比）なのは、前述したとおり、彼自身も故郷キンディネスにいる凛というおさななじみに片思い中だからである。しかし、恐ろしく鈍感な凛は、琴樹の告白が恋愛的なソレだとはまったく気付かず「私達ずっと友達よ！（笑顔）」という残酷な言葉を持って琴樹をフっている。

ちなみに、皐月も、普段無表情とはいえ、本人が公言する前に颯火達に悟られる程度の分かりやすさを誇る鶯の思いには全く気付いている様子はない。

…まあ、鶯が琴樹に相談を持ちかけるのも自然な流れというわけである。

「ま、見るからに女ッ気のないお前らなんかよりは、僕のほうが頼りがいあるってことだよ！　どうせお前ら恋愛経験無いんでしょ？」

「おまっ、どうせとか言うんじゃねえよッ！」

「間違ってないけど！　悔しいけど何も間違ってねえけどよ！」

勝ち誇ったような琴樹と悔しさをかみ締める葬屋颯火。

いや、結局は皆彼女いませんよね？

「僕はリンのことを愛してるから！　心の底から！　全力でッ！　愛の力で絶対幸せになるから！　別にフられたわけじゃないしッ！　めげないしッ！！」

「琴樹やめろって、お前ちょっと涙目だぞ！」

「うるさい！　お前らに僕のこの気持ちがわかるもんか！」

「おいなめてんのか！？　こっちなんかな、学校内全ての男子を甘い言葉、いや、言霊でたぶらかし、一時の夢と引き換えに金を根こそぎ搾り取る百戦恋魔と呼ばれた人にさえ会った途端『チェンジ！』だぜッ？！　なあ、葬屋！」

「そうだ！　おかげで被害にはあわなかったけどなァ！　それにしたってチェンジはねえだろうッ！　俺の何がいけないって言うんだ！　全部お前の所為だ颯火ァ！」

「ハァ！？　ざっけんじゃねえよ、どう考えても俺がモテない理由は手前の所為だっつーの！　その目つきどうにかしてこいよな！」

「んだと！？　女顔！　童顔！」

「っせえ！　不良！　悪人顔！」

「どっちもどっちだろ」

なんだかみんな可哀想に思えてきた。

「ていうか、お前らの話はどうでもいいんだよ。鶯、なんだかんだでさっきから黙りっぱなしじゃん。僕ばっか話してフェアじゃないでしょ、なんか言ったらどうなの？」

突っ伏したまま微動だにしない鶯をばしばしたたきながら琴樹が不服そうに言う。通りで颯火達が来た時、相談を受けている琴樹が妙に慌てていたわけである。きっと、いつも以上に恥ずかしい話を……うわっ何をするやm《琴樹の意向により以下削除》

「ほら、顔上げる！　この二人は、窒素だと思えばいいから」

「空気の中でもさらにどうでもいいと…」

ぼやく颯火にも琴樹は無反応。二人の存在は抹消されたようです。

「鶯！」

「……うー」

「うーじゃないよ！　今更恥ずかしがってんじゃないよ！　何のために僕を呼んだの？！　話すことがあるんでしょ？　ずっとそうなら僕もう帰るからね！？」

「……い、いや……待っ……」
慌てたように顔を上げた鶯を、キッと睨みつける琴樹。
「……まあ、待つけど。で？」
「……、その……、はな、しを……」
「だから、聞いてるでしょ」
「……、あ……う……、お、前は……」
「僕の話はもういいって言ってるだろ！」
強硬な態度を崩さない琴樹に、鶯は言葉を探るも上手く言葉に出来ない。
「だから、好きなんでしょ、あのおかっぱのこと」
「い……っ」
「さっさと認めたらどうなの？！　お前が今恥ずかしがってのも、何か悩んでんのも、全部あいつが好きだからなんだよ！！　あー、だの、うーだの言ってないで、言ってみろよ！　好きなら、好きだって！」
真っ赤になって硬直する鶯の肩を掴んで畳み掛ける琴樹先輩。黒い瞳をぐるぐる廻しながら、口をぱくぱくと動かして、言葉を捜している。
「……う…、…ぃ……」
「母音だけで話すな！」
「……ああ、……す……」
「はっきり！　大きな声で！」
「……う……だ、か…、…ら……」
ぐっと唇を噛んで、決心したように、鶯は琴樹を見据えた。
「そ、れが言え、ない、から、つらいん、じゃないかぁ…！」
ばこっと、琴樹の肩を叩いて小さな反抗までしながら、喋った。確かに、鶯が、一文節以上の台詞を、喋った。
背景化している主人公二人も呆然として、静まり返っている。
「お、れ…は……、いつも、心、を殺……して、な、きゃ…いけ、ない……から…、こ…とき、み、たいに……そ、んな、こ、と…うま……く、いえ、な、……いん……だよぉ、…」
黙秘剣という奇妙な言霊を使うために、普段極力感情を殺している鶯は、感情表現が酷く苦手なのだ。その表現手段を捨てることで手に入れた力なのだから。一方で、琴樹は思ったことはなんであれはっきりと言う。その点で、二人は対象的なのだ。
「…いわ、なきゃ…気づ、いて、もら…え……ない、の、は、わかっ…てる……けど……、でも……お、れは……、」
そこまで言って、鶯は口を閉じて、俯いてしまった。琴樹にまた怒られると思って、肩を縮めながら、言葉を待つ。そんな鶯に、琴樹は小さくため息をついて、肩から手を離してそのまま、ぽんと鶯の頭に乗せた。
「十分だよ」
「…え……、」
「伝わらなくたって、伝えられなくたって心配しちゃだめだよ。別に急ぐ必要なんてないし。ラッキーなことに、他に皐月が好きな人はここには居ないんでしょ？　だったら、お前が話せるようになった時に、言えばいいんだよ。今だって、さっきまで大して喋れなかったのに、ずいぶん饒舌になったじゃんか。まったく時間かけさせやがってよ。やれば出来るんだから。お前は声は出せるし、心も死んでないんだから」
「……そ、……う…か…、な……」
「そうだよ、大事なのは、好きで居続けることだから」
自分の「好き」という気持ちを殺さないこと。それは、伝えることでも、愛を求め

ることでもなく、忘れずに、その気持ちを、大切に抱き続けることだ。
「僕だって、小さいころからずううっとリンのことは好きだけど、『好きだ』って言ったのはつい最近だし。まあ、上手く伝わらなかったけど。それでも僕はリンが好きだよ。この気持ちは絶対に変わらない。忘れない。だから、僕は何度だって、リンに聞こえなくたって、言うんだよ」
好きだって。
それは歌のような、優しい響きだった。
「……鶯が伝えられるように成るまで、僕がお前の代弁者になってあげるよ」
琴樹はそう言って鶯の手をとった。
「皐月のことが好きか？」
「……ああ」
「誰よりも一番？」
「……ああ」
「心の底から？」
「……ああ」
「鶯は皐月のことが誰よりも心の底から好きだ」
「……ああ」
「よし、忘れるなよ。忘れそうになったら僕が何度でも、お前の代わりに言ってやるからさ。……、がんばれよ」
そう小さく言って、琴樹は笑った。
鶯は力強くうなずいて、よどみなく、はっきりと、言った。
「…ありがとう」

鶯の部屋の外で、無言で立ち尽くす主人公二人組。
琴樹先輩の本気の恋愛相談会の空気に耐えられなくなり、途中からそっと外へ出て、隙間から望んでいたのであった。たまには二人も空気を読みます。
しかし、鶯が喋ったり琴樹がリン以外の人（しかも男）に対して笑ったり、もう分けが分かりません。レアなことが起こり過ぎてリアクションも忘れて絶句である。
「これが恋の力か……、ヤベェ」
「パネェ……」
混乱してどこぞの双子の口癖がうつっている葬屋と颯火。
「葬屋…、俺も恋したいです…」
「ターム内に居る限り、選択肢は無口幼女かロリータ幼女だけだけど」
「葬屋…、俺犯罪者にはなりたくない…」
ごめんなさい。
「仕方ない、恋愛できないなら、俺達は別の方法で青春を満喫しよう！」
「なるほど！　別に恋だけが青春を謳歌する手段じゃないよな！」
「というわけで、音斬の所に行こう！」
「よし、そうしよう！　バンドやろうバンドッ！」
おーとーぎーりーくーん！と叫びながら爽やかに廊下を駆け抜けていく二人。
……相当混乱してますね。
そんな、馬鹿ドモの青春の一ページ。

其の後、テンションの上がった音斬がギターを掻き均し、騒音に爆がキレて夜中にどんちゃんさわぎになったりするけど、それはまた別のお話。

《終われ！》